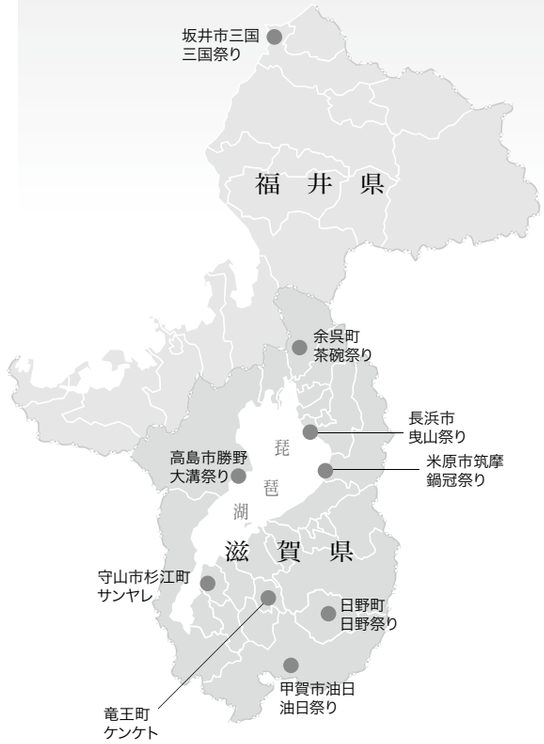
歳時世相篇 14

曳山と風流
春の祭りの民主主義

春の近江を彩る祭りには奇抜で華美なものが多い。平安末期から中世にかけてはじまる美意識の系譜に連なるものだが、伝統と格式を誇るものではない。様式を固定化させるのではなく、新たな趣向を凝らすところに個性が生まれる。祭りを自由に演出する伝統と近江の人と地域性とは、どこかでつながりがあるのかもしれない



笹原亮二（ささはらりょうじ）
民博 民族文化研究部
専門は、民俗学・民俗芸能研究。最近は、九州各地の島々を巡り歩き、祭りや芸能の伝播や定着について考えている。

近江の春は、私には祭りの季節というイメージがある。関西に居を移して一〇年以上たつが、それ以前も、四月から五月の連休前後はたびたび近江に足を運び、方ぼうの祭りを見物していた。さしずめ、四月中旬の長浜の曳山祭りあたりは早いほうになるだろうか。しかし、この祭りは湖北ということもあり、陽が傾くと急に気温が下がってきて、のんびり祭り見物どころではなくなる。それに比べて、四月末から五月初旬の連休の頃になるとすっかり陽気もよくなり、とくに晴れたりすると、祭り見物にはほんとうにいい季節となる。

実際の祭りも、気分が浮き立つ華やかなものが少なくない。蒲生郡竜王町山之上のケンケトや守山市杉江町のサンヤレなど、かぶり物や衣装にさまざまな色彩や意匠を凝らした踊り手が登場するもの、奴振りで有名な甲賀市油日の油日祭りや、一閑張りの鍋釜をかぶった少女が行列する米原市筑摩の鍋冠祭りなど、さまざまな扮装の人びとによる御神幸（ごじんこう）がおこなわれるものもある。また、長浜の曳山祭り以外にも、伊香郡余呉町の茶碗祭りや高島市勝野の大溝祭りなど、曳山が賑やかな囃子とともに巡行するところも少なくない。

祭りと風流

こうした祭りの踊りや御神幸行列や曳山の巡行には共通して見られる特徴がある。それは「風流」である。

この場合、「ふうりゅう」ではなく「ふりゅう」と読む。「ふうりゅう」というと粋で渋い趣味を連想するが、「ふりゅう」はそれとはまったく異なる。それは、色彩や意匠や動作や音など、さまざまな面で奇抜で派手で華美な趣向を凝らし、いかに人の耳目を集めるか、見物人を驚かせるかを第一とする美意識で、平安末から中世にかけて、祭りにおいて大いに流行した。先述のような、近江の祭りで踊り手や行列の人びとが奇抜な扮装や動作をするのも、さまざまな彫り物や幕で曳山を飾りたてるのも、囃子を賑やかに奏でるのも、いずれも平安末から中世にかけての風流の美意識の系譜に連なる趣向ということができる。

そんなことをいうと、近江の春の祭りを、平安・中世以来の伝統と格式を誇る日本古来の祭りといったかたちでイメージしそうになるが、必ずしもそれは適当ではない。「伝統」や「格式」といった言葉から想起される物事のありようの固定化は、そもそも風流の発想からはもっとも遠い。中世の風流の祭りのようすを見てみると、人びとはその時々の流行の風俗や音曲などを貪欲に取り入れて、競い合って趣向を凝らしていた。さらには、再び同じ趣向をおこなうことをいさぎよしとしない一回性が、風流のもっとも重要な眼目とされていたのである。

日野祭りの曳山

しかし実際は、江戸時代になると祭りの風流は名ばかりとなるところが増え、趣向がすっかり固定化して、それが現代に伝わっている場合も多い。それでも、風流の美意識や精神が感じられる祭りがないわけではない。やはり近江の春の祭りである、蒲生郡日野町の馬見岡綿向神社で五月二日から三日にかけておこなわれる日野祭りはそんな祭りの一つである。

三日の本祭りでは、紋付き羽織袴姿の田楽座の人びとに守られた神子に先導されて、三基の御輿と一六基の曳山が神社から御旅所に巡行して戻る。曳山は、古いもので二〇〇年、新しいものでも百数十年たつとされ、見事な飾り金具や見送幕で飾られた漆塗りの豪華なもので、それだけでも目を引くが、私が注目したいのは、曳山の屋上に飾られた作り物である。

この作り物は「ダシ」と呼ばれ、それぞれの曳山を出す町内の人びとが毎年趣向を考えて作る。「源義経」や「浦島太郎」といった昔からある古典的な題材の作り物がある一方、その時々の時事的な話題を作ってのせるところもある。わたしが以前見に行ったときは、大リーグのユニフォームを着たイチローがのっていた記憶があるので、二〇〇一年ということになる。昨年久しぶりに見に行ったら、NHKの大河ドラマの主人公の篤姫がのった曳山が複数あった。また、日本代表のユニフォーム姿の野球選手がのっていたものもあった。ブレイクしたタレントや芸人もよくのる題材である。

2008年の日野祭りには、北京オリンピックの日本代表選手を励ます作り物が選ばれた

こうした作り物には、人びとが、その時々に何に対して興味関心を抱き、何を考えているかがよく表れている。それらは素人が作ったものなので、技術的に高い水準に達しているとはいえないし、選んだ題材も、どちらかといえばステレオ・タイプであることは否めない。しかし、この祭りでは、作り物の趣向を、とにもかくにも祭りに関わる人びと自らが毎年選んで自由に更新しているとすれば、そういうやり方は、祭りに参加する人びとの主体性が基本となっていると見ることもできる。その意味で、ある種の民主主義であり、一部の階層が特権的に差配して古来の格式を遵守しておこなわれている堅苦しい祭りよりも、よほど好ましく私には感じられる。

＊

とはいえ、そうした祭りのありようも、決して手放しで礼賛するわけにはいかない。福井県坂井市三国町でおこなわれる三国祭りは巨大な人形の作り物をのせた曳山で知られるが、戦時中の祭りの写真には、巨大な兵隊の作り物をのせた曳山の姿が写っていた。民主主義がポピュリズムに堕してしまうのは、祭りの風流においても例外ではないのかもしれない。